

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 環境科学科

職階 助教

氏名 坂西梓里

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

環境科学科2年次クラス担任として、学生の修学支援を行っている。また環境科学科の科目として、リサーチローテーション、基礎生物学実習、分子細胞生物学・同実習、環境フィールドスタディー、課題研究などを担当している。さらに、学科科目のみならず、食品生命科学科においても分子細胞生物学・同実習、食品安全学なども担当し、他学科の教育にも関わっている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
SDGsと未来共生科学	環境科学科	選択	1	64
SDGsと未来共生科学	食品生命科学科	選択	1	19
分子細胞生物学・同実習	環境科学科	選択	2	35
リサーチローテーション	環境科学科	必修	2	65
環境フィールドスタディー	環境科学科	選択	2	10
環境生命科学	環境科学科	選択	2	28
環境リスク学・同演習	環境科学科	必修	3	67
科学技術英語	環境科学科	選択	3	8
課題研究I	環境科学科	選択	3	3
卒業論文	環境科学科	選択	4	6
分子細胞生物学・同実習	食品生命科学科	必修	1	52
食品安全学	食品生命科学科	必修	3	52
ジェネラリスト育成プログラム	環境科学科	自由	2	2

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

学生が主体的に課題を見出し、積極的に知識と技術を習得して課題解決に取り組むことは、自らの成長を実感するとともに、社会で活躍する人材になり得ると確信している。そのため、大学教育においては「自らの主体性を育てる教育」を目指している。講義・演習・実習を通して、学生が知識を深めることや物事を探求することの面白さと重要性を実感できる教育を行い、自ら専門知識や技術を培うように促すことが重要と考える。一方、今日の環境問題は都市・生活型公害から地球環境問題まで幅広く、一つの課題を解決すればいいというものではなく様々な課題が複雑に絡み合っている。そこで、学生の学びが学内だけで完結するのではなく、企業等の学外の団体と連携しながら学びの機会を創出することで、多様な視点を培う授業の実践を目指している。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

学生の学びへの知的好奇心を高める上で、丁寧かつ臨場感のある授業が重要だと考えている。そのため講義・実習では、①専門用語や授業のポイントの解説に十分な時間を取ること、②最新の情報を積極的に取り上げ、事例、ニュースや映像資料を活用すること、③複数の授業や授業・実習と卒業研究のつながりを意識させること、④授業を録画して復習用に公開する、⑤授業後に小テストを実施し、理解度が不十分であると思われる場合は次回の授業で復習を行う、などの工夫を行っている。

演習科目では、大学での学びと実社会での学びを融合させ、学生が企業と連携し、社会課題の解決に協働で取り組む授業を実践している。特に、フィールドワークを取り入れ、現場で話を聞き、自身の目で見ることで、社会課題を自分の課題として捉えるように促す工夫を行っている。このような学外と深く関わる授業は事前の準備に手間や時間を要するが、学外の方と協働し課題に挑む経験は、学生の「課題を見出す力」、「主体的に学ぶ力」「他者と協働して解決する力」を成長させている手ごたえを感じており、授業内で独自に行ったアンケートでは受講者が「行動力」や「協調性」の向上を実感しているという結果が得られている。この授業では学生たちは正解のない課題に取り組むため、特に考えるプロセスを重視し、教員からは「なぜ」を追求することで、主体的・協働的な学びをファシリテートすることを意識している。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

「環境フィールドスタディー」では、実社会の環境問題を対象に、学生自ら課題を見出し、現地調査や文献調査を通して解決策を立案する。提案は協力企業に発表し、実務的視点から助言を受けるほか、学生間の相互コメントも取り入れ、多面的に学びを深めている。さらに正課外では、関心の高い学生が企業と連携し、学内の脱炭素化やプラスチックごみ削減に取り組んでいる。

(2) ICTの教育活用

有

すべての授業は対面で実施したが、Google MeetやAzamoodleを活用して授業を録画し、復習用に公開することで学修機会の充実を図った。また、授業内アンケートや課題提出にはGoogle Formを用い、学修状況の把握と双方向性の向上に努めた。さらに、分子細胞生物学・同実習および環境生命科学では、データベースやウェブツールを活用した遺伝情報解析を取り入れている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

スライド教材ではイラストを多用し、文字数を抑えることで視覚的に理解しやすい構成を心掛けた。また、重要点を明確化するために穴埋め式スライドを取り入れ、主体的な学修を促している。さらに、現代の学生の映像情報への親和性を踏まえ、講義・実習ともに映像資料を積極的に活用した。加えて、体調不良者や配慮を要する学生には授業を録画し、オンデマンド配信を行った。

(2) 学生の理解度の把握

B

「分子細胞生物学・同実習」の講義回および「環境生命科学」「食品安全学」では復習用の小テストを実施し、受講者の理解度把握に努めた。理解度が不十分であると思われる場合は、次回の授業において復習の時間を設けるよう努めた。また、「環境フィールドスタディー」では、授業の振り返りや調べ学習に関するレポート課題の提出を実施し、次回の授業でコメントをフィードバックするように努めた。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

復習用小テストに対応したワークシートを作成・配布し、課題として提出させることで計画的な復習を促した。また、授業資料は自習すべきポイントが明確になる穴埋め式とし、学習の焦点を可視化した。さらに、自習に活用できる動画URL等を積極的に提示し、授業外学修の機会を拡充した。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

実習・演習科目では、授業内でワークシートに取り組みさせることで理解状況を把握し、十分に習得できていない学生には声かけや個別解説を行った。また、学生からの質問や要望には迅速に応じ、特に理解に課題のある学生に対しては授業後に補講や個別指導の時間を設けるなど、きめ細かな支援に努めた。

(5) 双方向授業への工夫

B

授業中に挙手を促しても発言しにくい学生が多いことを踏まえ、ワークシートを活用して理解状況を把握し、必要に応じて個別に声かけや補足説明を行った。今後は、発言が苦手な学生でも質問できるよう、電子掲示板やチャット機能の活用を進め、双方向性のさらなる向上に努めていきたい。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

該当なし

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

アンケートにおいて、PBLの初期段階での助言を求める意見があった。そこで、状況に応じて教員が介入し、グループワークを進めやすいように課題を提供したり、役割分担を促した。さらに早期にフィールドワーク（現場見学）を導入するなど、改善を図った。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

過年度と比べ、グループディスカッションの停滞は軽減された。一方で、目的を踏まえて意見を整理する力には課題が見られる。そのため、毎回の授業で主題・目的を確認する時間を設け、議論の方向性を明確にする工夫を継続している。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

課題の自分事化を一層深化させるため、現場調査やヒアリングを複数回実施できるテーマへ充実させる。また、主体的かつ継続的に取り組める学修となるよう、学生の実体験と結びつく身近な課題を扱う工夫を行う。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

ノート作成や要点整理が困難な学生への支援として、配布資料を穴埋め形式とした。また、小テストと対策課題を実施し理解の定着を図るとともに、授業内演習を充実させた結果、基礎的内容の理解度は向上している。今後は事前学習を促す仕組みを強化する。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

十分な時間をかけて実習内容や関連知識を習得できたとの声が得られ、理解度の向上も確認された。また、「スライドや説明が分かりやすい」との評価が得られるなど、学修支援の効果はあると考えている。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

一部のFD研修は参加できなかったものがあるが、オンデマンド受講できるものは受講している。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

社会の変化に伴い様々な課題が生じてくることから、「主体的に課題を解決する力」は、急激な社会変化の中で最も求められる力であると考え。そのため、今後も継続的に企業等の学外団体と連携しながら学内外で多様な学びの機会を創出し、学生の環境分野への興味・関心を高め、学生が目標を持って学び続ける力を育てていきたい。さらに、研究室配属学生への教育においては、研究に必要な力を養うだけでなく、「課題を発見する力」「資料やデータを集めて検討する力」「仲間と協働する力」を養う工夫を種々試し、学生の自己肯定感や達成感の獲得につなげていきたいと考えている。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

シラバス、小テスト、レポート課題、試験問題、教材（実習書、スライド資料、mp4動画ファイル）、授業評価アンケート